

COBALT-SERIES

孔雀の街

眉村 卓

集英社文庫

まゆむら・たく

昭和9年10月20日、大阪生まれ。大阪大学経済学部卒。日本ペンクラブ、推理作家協会、SF作家クラブ会員。『消滅の光輪』『なぞの転校生』『ねらわれた学園』『思いあがりの夏』『地獄の才能』『ねじれた街』『逃げ姫』ほか著書多数。趣味は写真を撮ること。柔道。



孔雀の街

COBALT-SERIES

昭和59年5月15日 第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者	眉村卓
発行者	堀内末男
発行所	株式会社集英社
〒101	東京都千代田区一ツ橋2-5-10
電話	東京 (230) 6171 (販売)
	(230) 6268 (編集)

印刷所	株式会社美松堂印刷所
	中央精版印刷株式会社

© TAKU MAYUMURA 1984 著者と了解のうえ検印を廃します



COBALT-SERIES

くじゃく
孔雀の街

眉村 卓

目次

孔雀 ^{くじゃく} の街	5
真 ^ま 利 ^り 子 ^こ	83
めまいの旅	123
デスブローアの女王	163
しかたなく、ウェンデイ	207

カット／勢 克史

孔雀の街



1

午後十一時になろうとするころ、ぼくと年の変わらないボーイがやって来て、ささやいた。

「今晚、ラストのあと、みんなと一緒に出るんだそうだ」

「何かあったのか？」

ぼくは、グラスを洗う手をとめて、反問した。

「三谷^{みたに}さんが、女の子を逃がしたんだ」

ボーイは答える。「ときどき来るうるさい客が、指名の女の子に、今夜終わったらつき合えて迫^{せま}ったんで、ことわり切れずにうんといったらしい。でも、どうしてもいやなものだから、三谷さんにあとで泣きついたんだよ」

三谷とは、ボーイ長の名である。

「それで……ラストの前に、こっそりと早退^{はやび}けさせたんだな？」

ぼくはいい、ボーイは頷いた。

「しかし、その客、いったん外へ出てから電話をかけて来たんで、ばれたんだってさ。そいつ、仲間とおもてで待ち伏せしているんだ」

ボーイはいう。「ひとりひとり出たら、そいつらに片っはしからなぐられるに違いないから、こっちはいっせいで出て、どっと逃げるんだそうだ」

「——わかった」

ぼくは答えた。

多分、そうするしかないであろう。ぼくたちアルサロ——アルバイト・サロンの従業員が、客となぐり合いの喧嘩などしたら、結局損をするのは、こっちのほうなのだ。

そしてぼくは、女の子を逃がしたというボーイ長や、みなで同一行動をとろうと決めた連中に対して、別に腹は立たなかった。迷惑だとも思わなかった。大体が、いやがる女を強引に誘おうとする客が悪いのだ。危険を承知で女の子を帰したボーイ長の行為は、英断えいだんというべきである。ぼくはこのアルサロではいちばんあたらしい、それもアルバイトだけれども、感覚としてすでにこの連中とは連帯感を抱いており、ここの一員のつもりであった。

もつとも……こんな風にアルバイト・サロンとかアルバイトとかいうと、知らない人は混乱するかも知れない。

アルバイト・サロンとは、素人しろうとの女性たちが酒を飲ませ相手をする、つまり店の営業形態で

ある。本当に女の子たちが全員そうなのかといえは、かなり疑問だろうが、看板がそうであるだけに、素人っぽい接客態度を売りものにしてゐるのは、事実だった。とはいえまだ二十歳になるかならないかのぼくには、店の女性のほとんどが、いかにも世馴れたおとなとして映るのである。先方から見ても、おそらくぼくは、二階の小さなカウンターにいる新米の若い男の子——という程度にしか認識されていないであらう。

そのアルバイト・サロン——アルサロには裏方としての男子従業員がいる。この“ホワイトレディ”はさほど大きな店ではないものの、それでも二十名近い男子従業員が働いていた。店長は別として、賄いのおじさんとリスト係の老紳士、それからドアマンを含めたボーイたち、酒場の人々である。そういえばレジ係もいるが、これは店長直轄の、女性であった。いや、ほかにバンドのメンバーもいるけれども、こちらは契約で来ている外部のメンバーだ。そして、その大半は、それが本業であった。こういう仕事はプロでなければ務まらない部分が多いのだ。が……今しがたぼくに伝えた下っ端のボーイと、酒場の手伝い——名称だけはバーテンドー見習いのぼくのふたりは学生で、アルバイトとしてここに勤めてゐるのだった。

アルバイトとしては、これはそれほど楽な仕事ではない。
原則として、年中無休である。

午後四時過ぎには、店に入らなければならない。従って大学の講義は第四限まで受けてあとは捨てるしかないのである。

店に入ると、自分の持ち場を掃除し、ビールの入った木箱をいくつも二階へ運びあげ、水槽へ移す。グラスを磨いてそろえ、おつまみの用意をした時分には、ぼくたちの営業開始なのだ。客の注文に応じて切られたチケットを、ボーイか女の子が持って来ると、そのぶんだけビールの栓を抜き、グラスとおつまみを渡す。フルーツとかサンドウィッチといった注文が来ると、伝声管で下の厨房へ頼んで、小さなエレベーターであがって来るのを待つのである。戻って来たグラスはその都度洗って次に備えなければならない。いってみれば階下の出店であり補助的な作業であるが、間違いをやれば弁償の義務があるし、ピーク時には目の回るような忙しさなので、午後十一時半のラストのころには、思考力を失って反射的に動くことになる。終わって帰りの地下鉄に乗るときには、ぐったりと疲れているのが普通だ。

しかし、ぼくはこの仕事を、いやいややっていたのではない。とにかく、わりのいいアルバイトなんてそうざらにはないのだから、はじめから覚悟をしていたのだ。勤めだすとみんなも（本心からそうなのかどうか、何ともいえないが）一応仲間扱いしてくれた。これで授業料や本代が稼げるのなら、結構としなければならぬ。そして一年あまり働いて来た今では、この仕事が好きになりかけていたのである。

……………。

ぼくは、目をあげた。

ぼくのカウンターから死角になっている二階のフロアが、少しざわざわしかけ、バンドがけ

だるい調子でグンナイを奏^{そう}しはじめている。

そろそろ、ラストなのだ。

何かの用であがって来たらしい酒場主任が、通りすがりにぼくに上半身を傾^{かたむ}けて、低くいった。

「もう聞いただらうけど……現場の者はいっせいに出るから、急いで片づけろよ」

「わかってます」

ぼくは答えた。

間もなく、客が席を立ちはじめ、次から次へと、汚れたグラスや皿が持ち込まれて来た。グラスのひしめく銀盆を器用に片手で支えながら、ボーイたちが小走りに来て、カウンターに置いて行くのだ。それらを手早く洗い、整理し、しまうのである。

最後のグラスを棚^{たな}に入ると、ぼくは着替えにかかった。

蝶^{ちよう}ネクタイを外^{はず}し、前^{まえ}垂^{ただ}れをとり……学生服を着るのだ。

それから、角帽をかぶる。

アルバイトに来るのにまで、何も制服制帽でなくてもいいではないか——と、笑う人もあるかも知れないが……ぼくは今述べたように、大学からの帰途^{きと}にここへ来るのだし、第一、外へ着て行ける服といえば、これしかないのである。それも、もうかなりいたんでいて、格好が悪いほどなのだ。服がそうなのだから、オーバーコートなどは、むろん持っていない。

いや、こんないいかたは、公正ではないだろう。ぼくが制服制帽姿で通しているのは、大学生というものがまだ多少は世間に信用があるために、何かややこしいことになっても大目に見てもらえる可能性があるからであつた。その点、損得ずくの心理が働いていたのは否定し得ない。

ともあれ。

着替えたぼくは、もう一度カウンターのあたりを点検してから、暗く細い木の階段をくだつた。

通用門へ出る廊下には、もうみんなが集まりかけている。

といっても、そこに居るのはフロアや酒場の現場の連中だけであつた。こういうことが起きているとは夢にも知らぬ店長は、事務所の人々と共に、とうに車で帰ってしまったはずだ。

ひとりが、通用門のそばへ行き、外を覗いて、戻つて来る。

「居るか？」

ボーイ長がたずねた。

「七人か八人」

戻つて来た男が応じる。

こちらの人々は、ふたことみこと、ささやき合つた。ちよつと多いな、とか、××組というような言葉が、ぼくの耳に入つた。

ぼくは早退したという女が、何という名であるのか知らない。そして、待ち構えている連中は、どこかの組関係者らしいが、それがどの程度の組なのか、その組の中でどんな地位にあるのか、何もわからなかった。だが……それらがどうであろうと、こうなればみんなと一緒に外へ出て……逃げるしかないのである。

「全員、そろったな？」

酒場主任が、暗い灯の下、ぼくたちを目で数えた。「それじゃ……行くぞ」

ぼくたちは、廊下を進んだ。

通用門のドアのノブに、ボーイ長が手を掛け……ぐいと開いた。

ボーイ長を先頭に、ぼくたちは外へ出る。冷え切った冬の夜風が、かすかな唸りを立てながら、殺到して来る。

大通りの手前の歩道に、外灯を受けて、七つか八つのシルエットが見えた。

「おい、お前ら！」

シルエットのひとつが動き、ボーイ長に近づいた。

ボーイ長とのみじかいやりとりのうち、他のシルエットも接近してくる。

突然、ボーイ長と喋っていたシルエットが腕を振った。長い腕で……フックを浴びせて来たのだ。

同時にボーイ長は身をかがめてかわし、叫びながら駆けだしていた。

「散れ！」

待っていた連中が、あと、どう動いたのか、ぼくにはわからない。その声を合図として、ぼくたちは思い思いの方向へ、走りだしたのだ。

寒風の深夜の町を、ぼくも駆けた。深夜といっても大都会の盛り場である。たくさん人間が行き来しているのだ。それをかきわけるようにして走った。走りつつ、ぼくはうしろから誰かが追ってこないかと、そればかりが気がかりだった。待っていた連中よりもこっちの人数が少し多かったのだから、ひとりがひとりを追うとしても、余りが出るはずである。そして、ああいう奴らがそんな真似をするわけはない。何人かがかりで、ひとりをつかまえようとするだろう。それだけ、こちらは（つかまれば不運だが）助かる率が高くなるのだ。だから、みんな、ばらばらになって逃げたのである。

走っていたぼくは、やがて、スピードを落として、歩きだした。人々の中を走り抜けるほうが、かえって目立つのに気がついたからだ。

「あいつだ！」

という声が聞こえて、ぼくは振り返った。

さっきの連中だ。

さっきの連中の、ふたりか三人が、こっちを指さしている。

「あの学生だ！」

「逃がすな！」

どなる声に、ぼくは再び走った。追いつかれたらどんな目にあうか、知れたものではない。全力で疾走^{しっそう}するしかなかった。

どこを、どう走ったのか、よくおぼえていない。

それでも奴^{やつ}らは、追って来るようなのだ。

目がくらんで来た。

もう駄目^{だめ}か——と思いながら、前方を見たぼくの視野の中、飲み屋の横丁のネオンがあった。

ぼくは、その横丁へ駈^かけ込んだ。

だが、うろうろしては、たちまち追いつかれる。

左手に、もうあかりを消した赤提灯^{めかちようちん}があり、そのわきに、がたがたの木の扉^{とびら}が半開きになっている。

ぼくは扉を引きあけ……中へ飛び込むと内側をまさぐった。掛け金が手に触れたので、掛けた。

数秒後に、ばたばたと外を走り過ぎて行く足音がした。通り過ぎた。

けれども、またいつ引き返してくるかかわからないので、闇やみの中、ぼくは荒い息を何とかして静めようとしながら、じっとしていた。

息が、楽になった。

どうやら、追って来た連中は、ぼくを見失ったようである。

もう大丈夫だろう。

そうなるとぼくは、にわかに自分がどこにいるのか、気になって来た。

この扉は半開きになっていたが……ということは、誰かが出入りしているのに違いない。その誰かは外にいるのか、それとも背後の闇やみの中にいるのか……いずれにせよ、ぼくは咎とがめ立てられても仕方のない立場なのだ。

外へ出なければならぬ。

ぼくは手さぐりで掛け金を外はずそうとした。さっきは夢中だったので気づかなかったが、ひどく錆さびびついているようで……なかなか外れないのである。

おかしいな。

力を入れて持ちあげようとすると、全体が抜けて、落ちたようだ。

ぼくは扉を押した。

固い。

あんなに簡単に動いた扉が、何かにひっかかっているらしく、動かないのだった。